

2021年ヤクザル調査を行いました！	02
調査員からのクーコール	04
調査メシ	06
やくざる七つ道具	08
解き明かす！屋久島の生き物の暮らし	10
ぶらり屋久島	14
屋久島の森の住人たち	16
犬山より	18

Research Group since 1989

# 2021 年ヤクザル調査を行いました！

昨年 2020 年は、京都大学の新型コロナウイルス対策レベルの変更で、集合翌日に無念の調査規模の大幅縮小が決まりました。定点調査をあきらめ、超低空飛行で墜落せずに済んだものの、長期的な調査隊の存続には黄信号が灯りました。これまで、調査員が 2 年、3 年と続けて参加し、経験者として運営を支えてきました。2 年続けて初参加の調査員がいないと、いずれ、事務局長の半谷以外、ほぼ全員初参加という、危機的な状況に陥ります。そうならないように、初参加の人を含めて調査員を募集しました。昨年も実施したことに加えて、さらに入島前の PCR 検査を行うなどの対策を進めました。これまでのような一斉に集合解散する方式をやめ、一度に集まる人数をできるだけおさえ、少しずついろいろな日に入島離島してもらうことにしました。

8 月 6 日に最初の調査員 8 人が屋久島に集合し、調査を開始しました。全国的な感染者数は、8 月中旬にピークに達し、屋久島町でもクラスターが発生しました。京都大学や屋久島町の感染対策が、調査中止にすると事前に決めていたレベルへ引き上げられるのではないかと、という強いプレッシャーを感じながら、わたしたちは調査を続けていましたが、もっと実際的なことでも調査は難航していました。

ひとつは、8 月に日本全国に居座った停滞前線による長雨です。台風一過だった 8 月 10 日以降、8 月 25 日まで、毎日雨が降りました。大雨で何度も調査をあきらめましたし、調査を始めたら雷が落ちてきて、一時調査員に定点から退避してもらったこともありました。2 日間連続して定点調査ができたのは、ようやく 8 月 23 日のことで、それまでは、一日調査しては一日休み、とか、半日シカ調査、といった感じでした。

もうひとつが、大川林道終点の手前 3km のところにできていた、林道の陥没です。無理やり横を車で通ろうと思えば通れなくはない程度の穴でしたが、連日の雨で少しずつ亀裂が広がっていき、その横を毎日通り抜けるのは危険でした。例年と逆に、陥没の手前、西側（入口側）の 5 班域から調査を始め、東に移動していききました。陥没箇所からはてくてく歩き。いつもの年なら軟弱定点と呼ばれ、林道終点のテン場から 2 分しかかからない 2d の定点に、1 時間かけて歩いて行きました。5 班域



悪天候続く中のテン場暮らし。霧は、永遠に晴れないように思えました。

から 2 班域までの瀬切川左岸の調査を終え、さすがに最奥部の 1 班域に、毎日歩いては行くのは勘弁、どうしよう、ということになった頃、ようやく天気が回復する見込みになり、8 月 24 日に終点テン場を設営しました。各自自分の荷物は担いでもらい、最低限の共同装備をジムニーに載せ、一回だけ陥没の横を通り抜けました。運転したのは私ですが、亀裂の上を



荷物を全部担いで、終点テン場を撤収します。

通るときに車が傾いて、あれほどどきどきとしたことはありませんでした。入山翌日、8 月 25 日から劇的に天気が回復し、そのあと 9 泊 10 日のテン場生活中、全日快晴でした。下山時に、本田剛章さんは、屋根にしていた 3 枚の大きな青フラと自分のザックとサブザック、推定 40kg くらいを背負子に載せて担ぎました。9 月 3 日以降は、川を渡らないといけないため、長雨中には行けなかった 3 班と 4 班の瀬切川右岸の調査を行いました。目標としていた全定点の 3 日間の調査が完遂したのは、調査最終日の 9 月 9 日のことでした。

調査中、何人もの調査員の皆さんの話を聞いて実感したのが、この 1 年半、学生さんたちが、いかにこれまでの「ふつう」の大学生活を制限され、野外で生物相手にさまざまな経験を積む機会を奪われていたか、ということです。このままでは、日本でフィールドワーカーが育たなくなってしまう、という危機的状況と言えるかもしれません。

わたしは、調査を終えた何人もの調査員に、「コロナのこういう状況でも調査を開催してくれてありがとうございました」と言われました。この 1 年、何とか元通りのヤクザル調査ができるようになりたいと願いつつも、一方で、ほんとうに今年調査をやっていいのか、ずっと悩んできました。その疑念は今も消えませんが、彼らのそういう言葉を聞いて、初めて、ちょっとだけ、調査を実施したことを、胸を張って言ってもいいかな、という気になりました。

今年の調査では、テン場でもマスクをつけ、黙って食事をし、歌を歌うこともありませんでした。まだまだ通常の調査には戻っていませんが、それでも、ミーティングでその日のサルの群れの動きを話しあい、輪になって感想を言うヤクザル調査が戻ってきました。2020 年の超低空飛行から脱することはできたと思います。

(半谷吾郎、1993-2021 年参加)

ヤクザル調査では、サルの調査経験のない人でもできる定点調査と、調査経験豊富な統括者（サルを追跡する人）が組み合わさって調査を行います。初心者でも学びながらデータを取ることに貢献できるところが、この調査の特徴です。



クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

## 大田幸弘

2010、2011 参加

「先生、僕、サルの研究したいんですけど。」

TV で見た霊長類学の特集が面白く、自分もそんな研究がしたいと高3 春の面談で相談しました。しかし、入試はうまくいかず、結局その次に興味があった食料生産を学べる大学に進学しました。そんな私に調査隊 OB・OG である谷大輔さんと東加奈子さんが調査隊のことを教えてくださったのが参加のきっかけでした。

調査では、本当に多くのこと（野生動物研究の方法と実際、チームでの動き方、天気図や地図の使い方、サルの識別方法、ロープワーク、野外炊飯など）を知ることが出来、興奮の毎日でした。調査は大変なことも多かったはずですが、不思議と良い部分のみに編集されています。苔むした巨木の間を縫って進んだ屋久島の森、ブルーシートの屋根の下みんなで飲んだ三岳、ミーテングのときのランタンを回しながらの感想、テン場で食べた苾米とランチョンミート、定点での蚊とスズメバチとヒルと睡魔との戦い、この世の終わりのような豪雨、ビデオカメラ片手に待っていた OM 群との奇跡の遭遇、調査員の方々などなど思い出せばきりがありません。

ちなみにヤクザルネーム“湾人”は、フェリー乗り場へ下見に行った際

になぜか台湾人と間違えられたというエピソードからいただきました。

その後、研究室では山口市内のタヌキやニホンアナグマの生態をまとめました。つい先日、その研究成果の一部が共著論文としてオンラインで公開されました。巣穴前でのニホンアナグマの様子を動画で見ることが出来るのでぜひ見てください。(Tanaka H, Fukuda Y, Yuki E, Ota Y, Hosoi E, Kojima W (2021) Cooperative den maintenance between male Japanese badgers that are delayed dispersers and their mothers. Journal of Ethology. <https://doi.org/10.1007/s10164-021-00718-x>)

現在は山口県の田布施農工高等学校で草花やフラワーアレンジメントを教えています。教科指導や生徒指導が思うようにいかず悩み葛藤する毎日です。そんな私が夏に生徒にする話はヤクザル調査隊の話と調査隊の ML で知り参加させてもらったウナギ調査での失敗（関係者には大変ご迷惑をおかけしました）の話です。これらの話は、普段は心ここにあらずといった生徒も顔をこちらに向けて聞いてくれます。中には私の話を聞いて「サルと屋久島 ヤクザル調査隊とフィールドワーク」を買ったという生徒もいました。生徒との接し方は教員ごとに様々ですが、私の接し方の根底には年齢や性別、考え方は違えども調査員全員で一つの課題に取り組むフィールドワークでの経験がある気がします。また、チームで取り組んだ一つのイベントなどが終わったときは全員で輪になって一人一言ずつコメントをもらう場を設けています。

きっと奇跡でも起きない限り、今後私がヤクザル調査に参加することはないと思います。しかし、夏になるとあの定点で一日サルを待っている変わり者がいると思うとそれだけでとても豊かな気持ちになります。

私にヤクザル調査隊のことを教えてくださった先輩方、調査隊の皆様本当にありがとうございました。



大田さんは、初めて本格的にビデオカメラを導入した 2011 年に、前期後期あわせて 12 日間、カウムの機会がなかった OM 群が、調査最終日の 13 日目に道路を渡るのをビデオで撮影し、奇跡の最終日フルカウントに成功したのでした。

# 調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、歴代の食当隊長が、レシピとともに語ります。



## 来栖可奈 2017-2019 参加

### ちらし寿司

毎年、入山の日のお弁当はちらし寿司です。調査地まで約15kmのハードな(?)山登りを終え、これを食べると「いよいよ調査が始まるなあ!」という感じがします。ヤクザル調査隊ではルーティーン化されている食事メニューなので、私以外にも同じように感じている経験者も多いのではないのでしょうか。

さて、このメニューのレシピは簡単です。調査員25人分、18合のご飯を炊き、市販のちらし寿司の素を1250g混ぜるだけ!(このg表記は調査隊でしか見ない気がします。よく売られているのは230g位なので5-6袋です。)。芯米を炊かなければ、失敗しません。しかも、入山前は炊飯器が使えます。何の心配もない!...と言いたいところですが、好和荘の炊飯器は8合炊きなのに、6合より多いと芯米になるのです。数年前、このことをすっかり忘れて大量の芯米を炊いてしまいました。以来、炊飯器には「6合まで」と書かれたガムテープが張られています。もう、誰も失敗することは無いでしょう。

では、このメニューで食当隊長としてドキドキするポイントは何か。そ

れは、みんなの分のお弁当が足りるか?ということです(私だけ...?)。ご飯の量は人数ごとにある程度決まっていますが、その年の調査員の食欲を加味して食当隊長が量を指示します。集合日から入山までは好和荘の冷蔵庫を使えますが、入山したら冷蔵庫は無いので腐らせてしまわないように過不足なく炊かないといけません。集合して3日。緊張がほぐれてきた調査員の食欲は未知数です。入山日の朝、桶いっぱいのちらし寿司の周りにぞろぞろと調査員が集まり、持参したお弁当箱におのおのが詰めていきます。お弁当箱の大きさに指定は無く、お弁当箱(というかタッパー)にいっぱい詰めていく調査員、そんな量で生きていけるのか不安になるほど小さいお弁当箱に軽くとる調査員など様々です。山盛りだった寿司桶はあっという間に底が見え、あと何人がとれてないだろうと不安になります。足りなかったら、いっぱいだった人に分けてもらったりしつつ全員がお弁当を詰め終わると一安心します。

このメニューの特別なところは、下山の時のお弁当もちらし寿司ということです。このころには、その年の調査員の食欲もわかってきて、余らせてしまう心配も、足りなくなる心配も無くなります。好和荘で詰めたようにお弁当箱にちらし寿司を入れながら、あっという間に過ぎていった調査の日々を走馬灯のように思い出します。そして、お風呂に入れる喜びとともに、終わってしまう調査への寂しさを感じます。もっとも、こんな感傷に浸る人は少なく、打ち上げに何を食べようかワクワクしている人が多いかもしれません。



入山日、すし桶いっぱいに作ったちらし寿司を、調査員が弁当用によそっていきます。

コロナ前、2019年までのヤクザル調査では、大川林道終点テン場への荷揚げは車で行き、多くの調査員はその間に歩いてテン場まで行っていました。昨年と今年は、人数が少ないので、全員車で行けるところまでは車で入山しました。

# やくざる七道具 3

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

## 無線機・トランシーバー

無線機・トランシーバーは、ヤクザル調査にはなくてはならない道具です。サルを探すレーダーである定点調査員は、サルを見つけたらいち早く統括者に知らせなければいけませんし、そもそも、森の中でひとりであるのに、他の人との連絡手段が断たれたらたいへんなことです。今年の調査でも、急な大雨に遭って調査中止と撤収を決めたものの、ひとりだけ何度呼びかけても返事がない、ということがありました。仕方がないので統括者が定点に行ってみたら、音量が1になっており、聞こえていなかった、というオチでした。定点調査員は、定点に着いたらすぐに、他の人に「こちら\*\*定点の\*\*です。定点到着しました。これから調査を開始します。聞こえる人は応答してください」と交信し、きちんとほかの人とつながることを確認しなければなりません。基本作業は大事ですよ、と、その調査員に大目玉を食らわせたのでした。

調査隊の初期から無線機は使われていましたが、最初使われていたのは、「ピコスケ」という商品名の特定小電力トランシーバーでした。1991年と1992年、鹿児島県の委託で行われた大規模調査の際に、大量に購入されたそうです。それ以降の年も、しばらくは、調査のたびに鹿児島大学の萬田先生の研究室に行ってピコスケを借りていましたが、次第に古く使えなくなっていったため、いろいろな研究費で、少しずつ、別の機種を買い替えていきました。わたしが初参加だった1993年には、トランシーバー

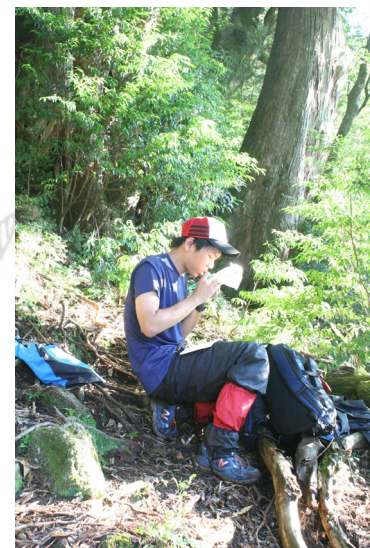
を意味するヤクザル用語は「ピコ」「ピコスケ」でしたが、この言葉も、いつの間にか通用なくなってしまいました。そして今調べたら、ピコスケは生産終了になっていました！涙

特定小電力トランシーバーは、出力が0.01Wまでと弱く、周りの電波に干渉する恐れが少ないので、使用に届け出や許可は必要ありません。値段も1万円を切ります。それでも障害物がなければけっこう届くことがあり、1995年に、栗生集落にいたときに電源を付けたら、約7km離れた大川林道の調査地から、「11cの\*\*です」という交信が聞こえたことがありました(11cは、今で言うところの2eの定点です)。ただし、尾根を越えたりすると、まず交信は届きません。

2011年は、なぜか通信状態が極端に悪くなりました。林道上の定点のピークが見える場所から、その定点に呼びかけても、ほとんどの場合、聞こえませんでした。その距離、わずか数百メートルしかないにもかかわらず、です。トランシーバーがあてにならないため、ある統括者は、サルを発見すると、即走ってわたしのところに向かっていました。調査が終わってから、統括者が見失った群れの音声を、定点の人が聞いていたことを知ったこともありました。

かつては、特定小電力を超える出力の無線機を使用するには免許が必要でしたが、このころには、免許を取らなくても、登録して数千円の登録料を払えば、出力が50倍のデジタル簡易無線機を使えるようになっていました。そこで、翌年からはそういう無線機を使用することにしました。尾根を隔てて、何キロも先でもクリアに交信できることに感激しましたが、しかし値段が高い。電池をあわせて約10万円です。とても全員に持たせられないので、定点調査員は従来の特定小電力のみ、統括者は高性能の無線機と特定小電力を両方持つ、ということになりました。

(半谷吾郎 1993-2021 参加)



定点に着いたら、まず無線で交信します。特定小電力トランシーバーは濡れに弱いので、ビニール袋に入れて使います。

# 解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 3

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

## ニホンザル *Macaca fuscata*

400種以上いる霊長類の中で、もっとも研究されている種の一つ。屋久島だけでも少なくとも135の論文が国際学術雑誌に発表されている。



## 屋久島の野生ニホンザルで観察された オス間の尻つけ行動の初記載

半沢真帆 2015 参加

半沢真帆 (2020) 屋久島の野生ニホンザルで観察されたオス間の尻つけ行動の初記載. 霊長類研究 36(2): 33-39.

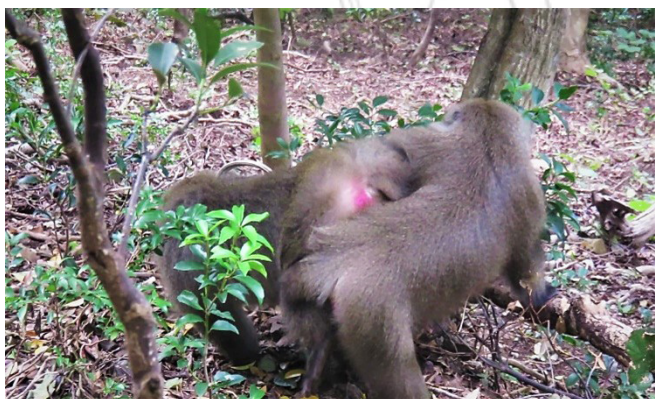
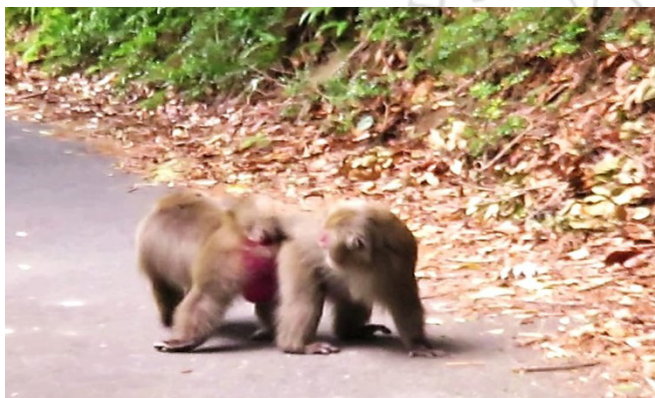
毎日山の中でニホンザルの群れを追い、彼らの行動を注意深く見ていると、ふと面白い行動を見つけることがあります。それがどんな些細な行動だとしても、とにかく忘れないように野帳に記録しておくのですが、なかには初めて見た瞬間から、「これはすごい行動を発見したぞ!」と直観的に思う時があります。それが今回ご紹介する屋久島のニホンザルのオス間で見られた「尻つけ」行動です。これまで霊長類における尻つけは、類人猿のボノボやチンパンジーで知られており、ボノボではオス間の社会交渉として、互いに後ろ向きになって尻を押し付け合うようにして、あいさつをしたり、緊張をほぐす機能があるとされてきました。しかし、このような尻つけという行動は、ニホンザルではもちろん、他のマカク属のサルを含めても今まで報告されたことはありませんでした。

修士一年の時、初の長期調査として意気込んでいた私は、3ヶ月間、屋久島西部に生息するニホンザルの1群を追っていました。ある日、いつも通り群れを観察していると、群れ内の1位オスが2位オスにゆっくり近づき、真横まで来ると立ち止まりました。すると次の瞬間、2位オスが立ち上がり、自身の尻を1位オスに向けてるようにして近づき、それに合わせるように1位オスも自身の尻を近づけ、そしてお互いの尻を付け合せてたのです(次ページ上の写真)。また面白いことに、尻つけの最中には、まるで犬のようにお互いに尻尾を振るのです。その行動を見て、「何だこれは!？」と驚く気持ちとともに、いい年した強面なオトナオスが可愛らしく尾を振りながら尻をつける様子に思わず山のなかで一人笑ってしまいました。そして、数秒の尻つけが終わると何事もなかったように近くで採食や休息を始めるのでした。このような尻つけは、約478時間の追跡のなかで8事例見られ、いずれも群れ内のオトナオス同士によるものでした。また、前述したような尻同士をつけるパターン以外にも、一方のオスが他方のオスの体側に尻をつけるパターン(次ページ下の写真)も見られました。霊長類では、オス同士の社会交渉の一つにマウンティング(馬乗り行動)というのがあり、その直前には受け手が乗り手に向かって尻を向けるプレゼンティングという行動が見られます。今回観察した尻つけも、直前に一方の個体によるプレゼンティングが見られたことから、尻つけはマウンティングを誘うプレゼンティングから派生した新奇な行動ではないかと考えています。ただ、乗り手と受け手といった明確な役割があるマウンティ

ある地域に固有にみられる行動のうち、環境の違いでは説明できず、直接の遺伝的基盤がない場合、学習によって世代から世代へ伝えられる、文化的行動である可能性が高くなります。本研究のような新奇行動の発見は、その研究の端緒になるものです。

ングとは異なり、お互いに相称的な行動を取る尻つけは、優劣が強調されないオトナオス間の新たな親和的な意思表示として役立っているのではないのでしょうか。また、尻つけ時に見られた尾振りについても、ニホンザルが尾を触覚的なコミュニケーションツールとして用いている報告は未だないため、新奇性の高い行動と言えそうです。こうして、全く予期していなかった新たな行動の発見が私の初論文となったわけです。

野生動物を追っていて何より最も楽しいのは、長時間つらい思いもしながらも山を駆けずり回るなかで、ふと彼らが見せてくれる驚きの行動に出会えた瞬間です。そして、「みんな！こんな面白い行動を見たぞ！」という昂揚感を、今回論文という学術的な場で初報告することができ、それが現在の自分のフィードワークで更にモチベーションとなり、もっと面白いものを見つけるぞという活力に繋がっています。



# ヤクザザルなよんま

定 点	
今日のお昼ごはん	調査開始から 考えるのは
焦り100倍 テンション100倍	クマコル枝バキ音
ひとりぼっち震えたら	ド迫力のカミナリに
あったかさが 身に沁みる	帰ったテン場の





屋久島には、ヤクザル調査隊になじみの場所がたくさんあります。観光客とも、島民の方ともちょっと違う、調査隊目線で偏った屋久島のいろいろな場所のご案内です。



## 終点テン場

終点テン場。それは、サルを求める若者たちが大川林道をひたすらに登った先、その文字どおり終점에設営される調査隊のベースキャンプのことです。例外はありますが、毎年前後期それぞれ25名ほどが、調査期間である1週間とちょっとを、この場所で過ごします。その歴史は古く、1993年、1994年の年末から新年にかけての調査で初めて使われ、1995年から今に至るまで多くの調査隊員がお世話になってきました。私にとっても、大学生夏休みの第二の帰省先のようなものでした。今回はそんな思い出いっぱい場所について書かせてもらおうと思います。

構造的にはおおまかにいうと、複数のテントを林道終点の崖下の空き地に固めて張り、崖上から虎縄を渡して背骨にし、巨大青フラ（ブルーシート

のことを、ヤクザル調査隊ではこのように呼びます）を、およそ15メートル四方の屋根にして、全体を覆ったものです。一部のテントは、サテライトとして林道を少し下った飛び地に設置されます。調査員が山に入ってする最初の仕事が、これら生活拠点の設営です。といっ



終点テン場、天気がよければ、夕食は外に青フラを敷いて食べます。2014年撮影。

てもテン場の要である虎縄の骨組みづくりは有識者の方々に委ねられるため、大多数は巨大青フラの縫い合わせをすることになります。2枚の青フラの端を重ね合わせて小石を挟み、その小石をてるてる坊主の頭にして、紐で首を絞めていくことで、この2枚をつなげていきます。15kmの登りで棒ようになった足を投げ出して、昼の太陽が照り付けるなかひたすらに小石のてるてる坊主を作っていると、今年も「来た」な…と実感が湧いてきたものでした。そしてその後のテント選びの際、雨のテント生活を熟知した経験者たちが素知らぬ顔でいいテントと土地をかっさらっていくのを見て、今年も「始まった」な…と思うのでした。

調査期間の日中、ほとんどの人は調査に出払うため、終点テン場では食事当番が思い思いにのんびりしています。五平餅を焼いたり、近くの定点を冷やかしたり、おやつを賭けて争ったり…。たまに群れが近くを通るので、下手をすると定点調査員よりサルとの絡みがあります。調査員が帰ってくる頃には外に青フラが敷かれ、1日頑張ったご褒美に、川でいい感じに冷やされたココアが待っています。みんなが揃って、わいわい夕飯の用意をするころには、谷に向かってきれいな夕焼けが見えます。

最後に終点テン場を語るうえで欠かせないのが、崖下テント群中央付近に位置する青フラ天井の憩いスペース、通称集会所の存在です。集会所では毎夜「三岳友の会」が開かれます。これは三岳愛好家の飲み会というわけではなく、単におやつを食べてみんなで駄弁る時間、つまり人との交流に飢えた定点調査員や、一日歩いて心と体が疲れた統括者になくはならない時間です。山の上の夜というのは不思議なもので、こういう時間にその人の隠れた本性みたいなものが現れるんですね。調査員たちはカンテ



夜になると、集会議場で「三岳友の会」が開かれます。2014年撮影。

ラの明かりのもと、心のままにおしゃべりや真面目議論を楽しみます。そして活力を蓄え、明日も寝坊しないよう、22時にはテントに帰って眠るのでした…。おやすみなさい。

(神さくら 2014-2020 参加)

大川林道（おおこりんどう）は、屋久島西部の栗生集落から北へ約2キロメートル、西部林道の南の端に入口がある、全長15.6キロメートルの林道です。途中、花山歩道の入口があります。



# 屋久島の森の住人たち3

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

## ニホンヒキガエル *Bufo japonicas japonicus*

本州西部、四国、九州、吉岐、五島列島、屋久島、種子島、屋久島に分布する。本州東部にはアズマヒキガエル (*B. j. formosus*) という別の亜種が分布する。



森の中で出会ったヒキガエル。びくともしません。

わたしたちの調査地である瀬切の森では、雨のあと、体長1センチメートルほどの何かが、濡れた地面の上をとび跳ねているのによくでくわします。黒いのはニホンヒキガエル、赤茶色っぽいのはヤクシマタゴガエル (*Rana tagoi yakushimensis*) の幼体です。ヤクシマタゴガエルは、4、5センチメートルほどの成体になってもぴょんぴょんとび跳ねますが、ヒキガエルは大きくなると跳びません。大きなものでは体長が15センチメートルにも達し、森の中で人に出会ってもびくともせず、どっしりと構えています。昔、とある調査員は、森でじっとしている立派なヒキガエルを置物だと思って、さわったら動き出したので「ギャー！」と大声で叫んだことがありました。

ヒキガエルは、ふだんは他のカエルよりも水から離れたところに生活していますが、オタマジャクシの期間は水の中でなければ暮らせません。ヤクシマタゴガエルや、本州の一部に分布する近縁種のナガレヒキガエル (*Bufo torrenticola*) は流水に産卵しますが、ヒキガエルのオタマジャクシは止水でなければ生きられません。屋久島では、水はそこら中にあるもの

地形が急峻で、ほとんどが川として流れています。ヒキガエルが産卵し、オタマジャクシがカエルになるまでの期間安定して存在している、それなりに大きな水たまりは、瀬切の森でどこにあるかと言われても、わたしにはパツと思いつきません。

屋久島でよく知られたヒキガエルの産卵地は、標高1600メートル付近にある高層湿原の花之江河と小花之江河です。高層湿原とは、ミズゴケが腐らずに泥炭として蓄積することで、中央部が周囲よりも高くなり、雨水などで水が供給されている湿原のことを言います。おそらく、屋久島で最大の「水たまり」でしょう。たくさんのヒキガエルが産卵に訪れるようです。海岸近くの大きな岩の上にできた水たまりにも産卵に来るようですが、海水ではオタマジャクシは生きられないので、淡水の水たまりを見つけるのはたいへんそうです。

大学院生だった20年前、わたしがみつけたヒキガエルの産卵場所は、森の中ではなく、大川林道にできた水たまりでした。当時ゲートのあった大川を渡る橋の先の道にできた、1メートル四方あまりの水たまりに、卵を見つけました。そこを車で通るときは水たまりをよけて、通るたびにオタマジャクシが大きくなっているのを、車を降りて観察していたのですが、あるとき、久しぶりにトラックがその場所を通過して、オタマジャクシは全滅してしまいました。

ヒキガエルの研究者に、ヒキガエルの糞はとても大きい、と聞いたことがあります。たしかにインターネットで検索してみると、長さ7、8センチメートルはあろうかという大きさの糞の写真が出てきます。知らなかったらサルの糞と間違えそうです。1984年に行われた、花山歩道周辺の原生自然環境保全地域のニホンザルの調査報告書では、不自然に昆虫が異常に多く含まれている糞があることが記載されています。これは、ヒキガエルの糞だったのではないかとわたしは疑っています。わたしが2000年ごろに本格的に瀬切の森でニホンザルの調査を始めるまで、上部域のニホンザルの食性についての研究報告は、ほとんどこの一本だけでした。そこ



わたしが大学院生だった2001年2月に、大川林道上の水たまりに産み付けられていたヒキガエルの卵。

屋久島には、里近くにニホンアマガエル (*Hyla japonica*) も生息しています。有尾類の両生類はいないことになっていますが、とある両生類学者のヤクザル調査隊OBは、屋久島にサンショウウオがいるといううわさを聞いて、何度か調査に来たそうです。

に「上部域のニホンザルは昆虫をよく食べる」という、わたし自身の観察とはまったく反対のことが書かれている理由が、長年謎でした。原生自然環境保全地域の調査で糞分析を担当し、前世紀のヤクザル調査隊の中心メンバーだった大竹勝さんは2015年に亡くなり、そのことについて話す機会がなかったことがとても残念です。（半谷吾郎 1993-2021 参加）



**お便り募集！**通信を読んだ感想、調査隊への質問などをお寄せください。いくつかは、次号以降の本通信の中でご紹介させていただきます。

ヤクザル調査隊友の会を設立してから1年あまり経ちました。会員の皆さんには、今年も、屋久島から調査員からはがきが届いたことと思います。会の運営の実務と経済的負担を減らすため、できる限り紙媒体での連絡を排する一方で、会員の皆さんとリアルなつながりを持ちたいという願いもある中で出てきたのが、屋久島からはがきを書く、というアイデアでした。わたし自身、年賀状を除けば、直筆のはがきを受け取る機会は、今ではほとんどありません。そういう時代だからこそ、こういうアナログな連絡手段に意味があると思いました。おまけに調査隊はマンパワーにこと欠きませんから、100枚のはがきでも、手分けして書けば、一人数枚です。もっとも、調査規模を大幅に縮小した昨年は、調査員一人が書くはがきの枚数は12枚。なかなかたいへんでした。ぶじ定点調査員を入れて調査を行った今年は、ひとりあたり3枚か4枚ですみました。

ヤクザル調査隊友の会通信「瀬切の森からの手紙」第3号  
2021年9月26日 発行  
発行者：ヤクザル調査隊事務局  
住所：484-8506 犬山市官林41-2 京都大学霊長類研究所  
ホームページ：<http://yakuzaru.php.xdomain.jp/>  
メールアドレス：[hanya.goro.5z@kyoto-u.ac.jp](mailto:hanya.goro.5z@kyoto-u.ac.jp)  
編集：半谷吾郎・上野尚久